

About movie

今日観た映画・・・「精神」

監督：想田和弘 公開：2009年6月

公式HP：<http://www.laboratoryx.us/mentaljp/index.php>

精神病患者の世界にカメラを向ける。その話題性とはウラハラに実に単調な映画だった。その理由は明確だ。カメラを向けた先に映る人々があまりに普通だから。

おそらくそれが監督の意図なのだろう。カーテンを開けたい。作中で監督が言う言葉だ。カーテンを開けた先にあったものは、こちら側と変わらない世界。ふたつの世界をつなくため、この映画はあえて単調に作られているのだと思う。

精神病である自分をどうやって受け入れることができたのか？とある患者に監督が聞く。健常者だって完璧な人間はいない。たまたま今は健常者としてやれているというだけだ。患者はそう答える。その通りだ、と思う。だけどそのくせ「健常者」という言葉の響きは限りなく重い。

作中で最も印象的だったのは、精神病になったきっかけを患者が話すシーンだ。ある女の人はきっかけを尋ねられながら、それはあの時、あの時、あの時と自分の人生を際限なくずると話し続ける。またある男は断言する。テストを全部白紙で出したあの時。あの時から俺はこっち側の世界に来た。

何かが決定的に違ってしまう瞬間。それはどこにあるんだと考えると怖い。先日猛烈に仕事をしたくないという衝動に駆られた。とにかくこの席に座っているのが嫌だ。私は席を立ち、会社のまわりをぐるぐる1時間以上も回り続けてしまった。(その後席に戻って何食わぬ顔で仕事を続けた。)

そういうことはたまにある。人に発見されていないから良いものの、知っている誰かに見つければ、それがわたしにとっての「あの時」になり得るのではないかと思うような瞬間。

そう思えば、わたしはこの映画の登場人物達を近くに感じる。だけどわたしも同じだ。なんて言ったら、何が分かるんだと彼らに怒られるように思う。誰だってつらい、なんてことを言ったら彼らを否定することになってしまうだろう。近づくことなんてできない。そこに線があることでわたしはわたしを引き留めることができる。そして、そこに線があることで彼らは彼らを守ることができるのだ。本当は違いなんてないのだとしても、わたしたちはそこに線を引くだろう。

例えば殺人を犯したとする。その瞬間が来たからと言って、自分が全て変わってしまうわけではない。昨日の続きを生きるだけだと思う。だけどやっぱり昨日と今日は決定的に違ってしまう。人を殺したいと思うことと人を殺すことは決定的に違うからだ。

だけど何が違ってしまうのだろう。

わたしにはそれが分からない。

分からないまま、わたしはカーテンを閉めた。

鳩山 豆子(はとやま まめこ):1982年生まれ山口出身。映画をコヨナク愛する。最近のおすすめ映画は「俺たちに明日はないッス」。